

2024年10月13日（聖霊降臨後第21主日、特定23、B年）

牧師メッセージ

「神は何でもできる」

（マルコによる福音書 10:17-31）

司祭ヨセフ太田信三

あるお金持ちの人がイエスに走り寄り、ひざまずいて尋ねました。

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

このセリフから、彼が強く救いを望んでいたことが想像できます。彼は十戒に書かれていることはすべて守ってきたと言います。そして当時、お金持ちは神に愛されている、などと言われていたようで、彼は救われる自信があったのかもしれませんが。けれども、救いが保証されたわけではありません。ですから、「善い先生」であるイエスに「あなたは救われる」と言って欲しかったのでしょう。しかし、イエスは彼を見つめ、慈しんで言われました。「あなたに欠けているものが一つある。」

彼の不安は的中してしまいました。しかし、そこにはイエスの慈しみの眼差しがありました。この「慈しむ」という単語は、「愛する」と同じ単語です。彼を見つめ、慈しんだイエスは、彼のことを愛し、彼を招いたのです。しかし彼はその愛を受け取ることなく、その場を立ち去ってしまいました。

彼は十戒を幼い頃から守ってきました。しかし残念ながら、十戒の最も大事な心を彼は置き去りにしていたのです。パウロはローマの信徒への手紙でこのように言っています。

『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、その他どんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。」これはイエスの教えを忠実に受け継いだ言葉です。十戒の根底にはこの隣人への愛があるのです。彼は目に見える保証としての財産に頼っていました。しかし、この世の富がいくらあっても、隣人への愛がなければ、人は生きられないのです。先週の、「人が独りでいるのは良くない。」という神の言葉の通りです。この世のもの、目に見える保証に囚われているうちは、自ら相手に施すとか、互いに与え合う、そういう真実に隣人と共に生きる道が見えないのです。

イエスは財産を持っていることを否定しているわけではありません。神に信頼するよりも、目に見える保証としての財産に頼っていては、その道は見えないと言っているのです。それゆえ「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」のです。人間の力だけでは、人は目に見える保証から離れられません。しかし、「人間にできることではないが、神はできる。神は何でもできるからだ。」と、イエスは言います。信じることができず、手放すことができないわたしたちを、信じる者へと神は変えてくださいます。

「神は何でもできる」とはそういうこと、つまり、人を愛に生きる者へと変えることにおいてこそ、神は全能を表されるのです。この神の助けによって変えられ、目に見えるものに頼る道ではなく、愛に生きる道を歩んでいくことができますように。